

精神看護学における性に関する教授案の検討

—看護学生の性に関する調査から—

畠山義子^{*} 土屋八千代^{*} 福永ひとみ^{*} 野澤由美^{*}

Examination of teaching methods for sexuality within the Mental Health Nursing curriculum. According to the study on the sexuality of the nursing students

Hatakeyama Yoshiko Tuchiya Yachiyo Fukunaga Hitomi Nozawa Yumi

(1997年9月8日受付)

ABSTRACT

Mental Health was newly established and added to the specialized basic subjects when the curriculum was amended in the 1990 fiscal year.

For this subject, the sexuality of patients is taken into account in understanding them, and in seeking the ideal method of supporting patients in solving their individual sexual problems.

The mental health nursing department, based on the concept of human sexuality, has conducted the unit in order to develop the students capability to view sexuality from various angles and to support each patient individually.

It is necessary to create a teaching method for sexual education that properly reflects that emotions, attitudes and values towards sexuality are influenced by background factors at the time as well as culture and society, and that this is acquired at an extremely personal level.

Hence, this paper describes the subjects in teaching sexuality within the Mental Health Nursing curriculum, after introducing and evaluating the proposal for the teaching method under which the results of the study on the attitudes of students toward sexuality are reflected.

Key words: Mental health nursing. Proposal for the teaching method, Sexual consciousness. Sexual behavior.

Nurses who support patients in solving their sexual problems.

*本学 精神看護学

I はじめに

平成2年度の看護教育カリキュラム改正で「精神保健」が専門基礎科目の中に新設され、その教授内容として「心の発達と心の動きに関連する要因、及び性の概念とその発達」が示された。これは、看護の対象である人間を理解するには、性的側面を含むことの重要性の指摘であり、これをうけ、看護教育では患者の性を尊重し、その個人の性に対する援助のあり方が模索されている。基礎看護教育の中での性の授業について、大谷は「今までの性に対する考え方はいわゆる『生殖性の性』に片寄り、母性看護学の領域でのみ扱われ、他の領域に於いては無関心であった」¹⁾ことを指摘している。又、精神保健に性の授業を託されたことに対しては「精神科学と性との関連は、人間の性に関する研究が精神病理学の分野から始まったことに由来する。しかし、それを人間の性に関する基礎的な理解を深める性科学（人間の性を人間に関わりのある広範な学問分野の交差のなかで科学的に捉えようとするもので、人間を中心とした総合科学）と考えるなら、今回の位置づけは誤りがあるといえよう」²⁾とも指摘している。このように、性の授業の位置づけについて様々な見解があるが、いずれにしても、今まで母性看護学だけに依存していた内容を、人間理解の真髄として性を深く学ばせていく方向となった。

性に関する教育の現状として、高村らは「全国的にみてセクシュリティに関する学習は、精神保健の中で実施されていた。しかし、独立した科目、たとえば『性科学』として科目だてしている学校、精神保健に編成せず他の看護専門科目の中に、たとえば『基礎看護学』や『精神科疾患看護』の中に編成している学校もあった。試行錯誤しながら、性に関する教育に対する独創的な取り組みがなされていることが伺える」³⁾と報告している。

また、何を教えているのかについては「全国的

な傾向は精神保健をバックに、人間の性を理解し、援助する看護の機能や役割りをかなり意識している。反面、健康な性機能、性反応（性意識・性行動）あるいは愛および結婚・生殖・避妊など、特に健康な性の多様性を深める内容が極端に少ない。しかし、大まかに見れば『性』の原理的・本質的理解を目指すものと、看護への応用を目指すものとの2方向に大別される」⁴⁾とし、平成2年度カリキュラム導入3年後の調査結果で全国的傾向を述べている。

本短大の精神看護学では、「人間の健全な心の発達とそれに影響を与える要因を理解し、現代社会における精神的健康の保持増進、及び危機状態への援助に必要な基礎的知識・技術を学修し、その過程を通して自己洞察し得る態度を養うこと」⁵⁾を目的として科目構成を行っている。その中で精神保健論は「心と性の発達」に焦点をおいて教授内容を作成している。そして、その中の性の概念については、性機能を中心とした身体的側面にとどまらず、一人の人間の総合的側面であるという、いわゆるヒューマン・セクシュアリティと言う概念で理解をすすめ、ライフサイクルにそって人の性的発達を理解することから性を多面的にとらえ、性の援助者としての姿勢を養っていくことを主要なねらいとしている。

このねらいをもとに看護学生を対象に教育を行う際、学生のレディネスを十分に把握しておく必要がある。つまり、対象者は20歳前後の現代青年であること、性に対する感情や態度、価値観はその個人の成長発達してきた時代背景や文化・社会に強く影響され、極めて個人的レベルで習得されていくものであること、今日の情報社会においては性に関する情報が氾濫していること、等である。そして、その結果、性に対してどのような意識、感情を持っているかを把握し教授案を作成しておくことが重要と考える。又、単元のねらいを達成するには、援助者として自己の言動の影響を考えての対応がとれることが必要と考えた。

そこで、さまざまな価値観にあり、複雑な現代の社会背景の中で生きている本校2年生（解剖・生理学、心理学系、及び各看護学に於いては概論はほぼ終了、保健論は途中の段階にある）が持っている性のイメージ、及び性的問題に遭遇した時に抱く思いと、その対応について調査し、その傾向性を反映した教授案を作成していくことにした。そして、教授案の評価を通し、精神看護学における性の教育についての課題を明確にする為本研究にとり組んだ。

II 研究目的

1. 教授案に反映させる為に看護学生の性意識と性行動を明らかにする。
2. 教授案を評価する。
3. 平成9年度の改訂カリキュラムの精神看護学の再構成課題を明らかにする。

III 概念枠組みと用語の定義

1. 関連文献の検討と概念枠組み

世界保健機構（WHO）では性的な健康状態とは、「人間が身体的、情緒的、知性的、社会的な側面からとらえ、かつ統合された状態をさし、性の存在によって人生が豊かになり、パーソナリティや人間関係、さらに愛情が深まるようになる」⁶⁾と規定している。

ヒューマン・セクシュアリティという用語と概念は、1960年代医学教育の中に性教育の重要性が認識されてきた中で、1964年にアメリカのL.A.カーケンダールやM.カルデローンらが創設したSIECUS（Sex, Education Information Council of the United States：アメリカ性情報、教育協会）が、始めて提唱した。カーケンダールは「セクシュアリティとは、人格と人格の触れあいの全てを包含するような幅の広い概念で、人間の身体の一部としての性器や性行動のほか、他人との人間的なつながりや愛情・友情・融和感・思いやり・包容力など、およそ人間関係に

於ける社会的・心理的側面やその背景にある生育環境なども全て含まれる」⁷⁾と述べている。

セクシュアリティについて、エリス（Ellis, 1981）は「ひとりの人間の統合的な側面である。セクシュアリティは快楽の源泉としての身体の意識や、女性あるいは男性としての自己認識、そして固有の性的存在としての自己の認識から出来上がっている」⁸⁾と述べている。

性について、河野は「性には大きく分けると、生物学的な性と心理・社会的な意味での性がある。前者をセックス（Sex）、後者をジェンダー（Jender）と分けて呼ぶ。二つを統合し、広い概念を持つ性をセクシュアリティ（Sexuality）という。男女の性別の性、生殖の性、性行動の性、性愛の性、男らしさ、女らしさとしての性、性役割と言う意味での性、医学的にはさらに生殖器官としての性に加わる」⁹⁾と述べている。

看護の領域でも人間の性をセクシュアリティと捉え、それは「人間の存在（全体）の中で性を捉えようとする表現であり、性別の性、生殖の性、快楽の性、性欲の性、性衝動、性行動、性意識、性機能などを包含する」¹⁰⁾と井上等は述べている。

このように今日では、人間の性を「生殖性」を中心としたセックスという捉え方から、ヒューマンセクシュアリティと言う表現に代表されるように、連帯性、親密性を含む心の結びつきを含むもの、一人の人間の総合的側面であるという捉え方になってきている。

以上、文献検索結果から本研究では、性の概念を以下のように定義した。

《性とは人間の持つ身体的側面（性機能）、精神的側面（快楽性、心の安定性）、社会的側面（人間関係、社会が求める役割性）が相互に関連したものである》

人間の性は、身体、精神、社会的側面の3側面が相互に関連しているものである。3つの側面の要素を持つ性はその個の持つ意識と現れる行動とで見ていける。ある言葉や場面からの連

想、又、おこすであろう対処行動でその人の性意識および性反応を捉えることが出来ると考えた。そこで、今回、性意識を「性」と言う語からうけるイメージの表現と、具体的場面における「思い」とで把握、性的場面における対処行動を性反応とし、具体的場面における「対応」を記述してもらうことで捉えることにした。

2. 用語の操作的定義

性意識とは「性を認識し、思考する心の働き」とし、今回の方法では「性」という言葉に対するイメージと、性的場面を設定しその場に遭遇した時を想定しその「思い」を表現してもらい把握する。行動は内面の精神活動や無意識の過程も含めての、生活体の示す内外の刺激に対する反応の総体を示すことから、上記の「思い」に引き続きとるであろう「対応」を性行動として捉えた。

IV 研究方法

1. 対象者：平成7年度入学、2年生(146名)

2. 具体的方法：

〔性と精神保健〕 教授前の調査

実施日：平成8年6月20日

質問紙を用いて教室で無記名の集合調査を行った。実施前に教授案に反映させるべく調査説明と依頼を行い、約10分間用いて実施した。

以下の2点について記載してもらった

①「性」に対し浮かんだイメージを、思いつだけ記載する。

②「場面」を設定(〇〇病院での実習中のバイタル測定時、慢性疾患で長期入院中の中年期の患者にお尻を触れられたとします。そのような時、あなたはどのように思いますか。又、どう対応しますか) その時の思いと対応について想定し記載する。

〔性と精神保健〕 教授後の調査

実施日：同年10月3日

前の調査と同様の方法、説明、依頼を行った。約10分間用いて実施した。内容①は講義前に質問したと同様、ただし、②の「場面」は変更した(臨床実習時70歳の患者に清拭実施中に抱きつかれたとします。その様な時あなたはどのように思いますか。又、どう対応しますか)

3. 分析の方法と手順

1) 教授前のデータは、以下の①②③に分析し、教授案に反映すべき内容を抽出する。

①イメージ語の集計；1人当たり計上語数の範囲と平均数、上位5位までの内容・分析

②イメージ語を身体、精神、社会の3側面から分類・分析

③設定場面から学生の思いと対応の内容を下記の視点で分類、望ましい群、望ましくない群、中間群に区別し内容分析

a) 分類と分析の視点(表1)

表1：分類・分析の視点

分類	分析	思 い	対 応
一 次	A	自分中心のもの	自分中心の言動
	B	患者の行動について感じたもの	患者を思っている言動
	Ⅲ		第三者相談 ◎
二 次	a	肯定的な受け止め ◎	肯定的な解釈のもの ◎
	b	否定的な受け止め ×	否定的な解釈のもの ×
	c	分析的・解釈的なもの ◎	分析的・解釈的・問題解決に向かうもの ◎
	d	回避的なもの ×	ごまかし・気づかないふりをするもの ×
	e	感想・単なる感情の現れのもの △	深い意味を持たないもの △

注；一次分類のA、Bにかかわらず、望ましい群(◎)、望ましくない群(×)、どちらも言えない中間群(△)に群分けした。

思い；一次分類

◇設定場面を読み、自分だけの表現に止まる〈自分中心のもの〉、患者の行動まで及んで表現したもの、〈患者の行動について感じたもの〉に2分。

；二次分類

◇その表現の内容により、〈肯定的な受け止めのもの〉、〈否定的な受け止めのもの〉〈分析的・解釈的なもの〉〈回避的なもの〉〈感想・単なる感情の表れのもの〉の5つに区分した。

対応；一次分類

◇とるであろう行動（対応）として表現した内容が、〈自分中心の言動〉で終わるもの、〈患者を思っている言動〉まで及んでいるものに分けた。

；二次分類

◇その表現された内容が〈肯定的な解釈〉を伴う者、〈否定的な解釈〉の結果からのもの、その行動が〈問題解決に向かうもの〉であるか、〈ごまかし・気づかないふりをするもの〉、または〈あまり深い意味を持たないもの〉の5つに区分した。

なお、問題解決のための第三者への働きかけを行うとしたものは、〈第三者相談〉として別に取り出した。

学生は実習期間中様々な事柄に遭遇することが予測される。そうした中、性的場面に於いては、そこでの表面的な現象だけに目を向けるのではなく、性はその人の全人的に統合されたものという見方から対応できることが望ましい。患者の言動に対し、なぜかの視点で分析的に見て、自分の言動を考えていく事が看護者として要求されていくことである。そうした対応、見方が出来ない場合、実習中であるなら相談していく方向をとることが望ましいと考える。

b) 望ましい群、望ましくない群、中間群の群分け

思い；思いにおける望ましい群とは、引き起こった思いが、自分だけでなく対象までの両者に至り、その内容が分析・解釈的であること

〈自己及び他者の両者の分析・解釈群〉と、両者に於いての記述がなくてもどちらか一方の思いが分析解釈的であるもの〈自己あるいは他者のどちらか一方の分析・解釈群〉、分析解釈されていなくても、どちらか一方でも、肯定的な受け止めの表現がされているもの〈自己あるいは他者の肯定群〉とした。

その中で、最も望ましい群を〈自己及び他者の両者の分析・解釈群〉とした。望ましくない群とは、〈自己及び他者の両者否定群〉〈自己あるいは他者どちらか一方の否定群〉〈回避・ごまかし群〉とした。最も望ましくないものを〈自己及び他者の両者否定群〉とした。中間群として〈感想・単なる感情の表れのもの〉とした。

対応；望ましい群とは、とるであろう対応が自分及び対象に向けて問題解決に向かうもの〈自己及び他者両者問題解決群〉、自分あるいは対象どちらか一方の対応が問題解決に向かうもの〈自己あるいは他者どちらか一方問題解決群〉、問題解決に向かわなくても否定的行動でなく、肯定的行動であるもの〈自己あるいは他者肯定群〉及び第三者に相談を持ちかけるもの〈第三者相談群〉とした。その中で、最も望ましいものを、〈自己及び他者両者問題解決群〉とした。望ましくない群として〈自己及び他者両者否定群〉〈自己あるいは他者どちらか一方否定群〉〈ごまかし・気づかないふり群〉とした。最も望ましくない対応を、〈自己及び他者の両者否定群〉とした。中間群として、〈深い意味を持たないもの〉とした。

④、①～③より学生の性意識と性反応の傾向性を把握し、教授案に反映すべき内容を明確にする。

2) 教授案の作成。

3) 教授後のデータを教授前と同様の手順で分析する。

4) 前後の比較、及び教授案の評価をする。

5) カリキュラム改正に向けて、精神看護学における性の授業に関する課題を明らかにする。

IV 結果

1. 教授前の調査結果

当日出席者142名全員から回答が得られた。

(回収率;100%)

1) 性意識について

性に対するイメージ語は252語が表示され、一人当たり0～22語、平均は3.7語であった。

イメージ語の上位は「男、女」「大切」「愛」

表2 性に対するイメージ語の上位5位までの項目

複数回答

	教授前		教授後	
1位	男、女	66人 (42.2%)	男、女	37人 (32.1%)
2位	大切	20人 (14.0%)	男性、女性	15人 (13.0%)
3位	愛	19人 (13.4%)	欲求	14人 (12.1%)
4位	恥ずかしい	15人 (10.6%)	SEX	11人 (9.6%)
5位	SEX	11人 (7.7%)	愛	8人 (6.9%)
	生殖	11人 (7.7%)	愛情	8人 (6.9%)
	男性、女性	11人 (7.7%)		

n=142

n=115

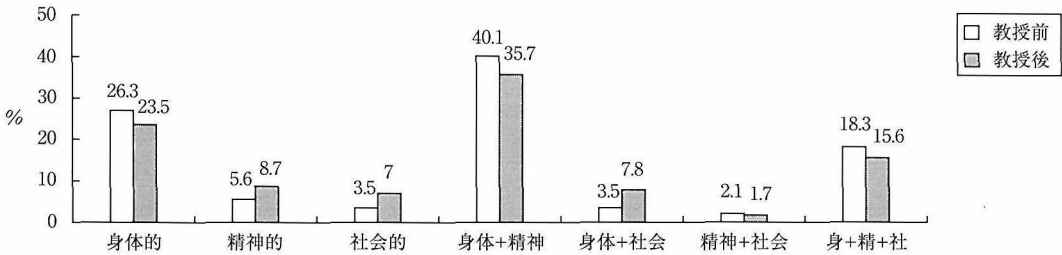


図1 3側面から見たイメージ表現の変化

表3 設定場面に対する学生の「思い」の分類

群	分類	教授前 (n=142)		教授後 (n=121)	
望ましい群	自己及び他者, 両者分析・解釈 群 (A-c と B-c を含む者)	2人 (1.4%)	54人 (38.0%)	2人 (1.7%)	61人 (50.4%)
	自己あるいは他者, 一方分析・解釈 群 (A-c, 又は B-c)	44人 (31.0%)		47人 (38.8%)	
	自己あるいは他者, 一方肯定 群 (A-a, 又は B-a)	8人 (5.6%)		12人 (9.9%)	
中間	感想・単なる感情の現れ 群 (e)	12人 (8.5%)	12人 (8.5%)	27人 (22.3%)	27人 (22.3%)
望ましくない群	自己及び他者, 両者否定 群 (A-b と B-b を含む者)	3人 (2.1%)	76人 (53.5%)	1人 (0.8%)	33人 (27.2%)
	自己あるいは他者, 一方否定 群 (A-b, 又は B-b)	72人 (50.7%)		32人 (26.4%)	
	回避, ごまかし 群 (A-d, 又は B-d)	1人 (0.7%)		0人	

*両者肯定は「思い」「対応」とも皆無であった。

表 4：設定場面に対する学生の「対応」の分類

群	分類	教授前 (n=142)		教授後 (n=118)	
望ましい群	自己及び他者、両者問題解決 群 (A-c と B-c を含む者)	0 人	31人 (21.8%)	0 人	55人 (46.6%)
	自己あるいは他者、一方問題解決 群 (A-c, 又は B-c)	21人 (14.8%)		47人 (39.8%)	
	自己あるいは他者、一方肯定 群 (A-a, 又は B-a)	1 人 (0.7%)		7 人 (6.0%)	
	第三者 相談 群 (Ⅲ)	9 人 (6.3%)		1 人 (0.8%)	
中間	深い意味を持たない 群 (e)	1 人 (0.7%)	1 人 (0.7%)	10人 (8.5%)	10人 (8.5%)
望ましくない群	自己及び他者、両者否定 群 (A-b と B-b を含む者)	1 人 (0.7%)	110人 (77.4%)	0 人	53人 (44.9%)
	自己あるいは他者、一方否定 群 (A-b, 又は B-b)	77人 (54.2%)		28人 (23.7%)	
	ごまかし、気づかないふり 群 (A-d, 又は B-d)	32人 (22.5%)		25人 (21.2%)	

であり、上位 5 位までの語は表 2 に示した。

イメージ語を身体的・精神的・社会的の 3 側面から分類した結果を図 1 に示した。身体的と精神的の 2 側面からとらえた学生が 40.1% と一番多かったが、1 側面のみの学生が 35.9%、3 側面からは 18.3% であった。

設定場面に対する「思い」の分析の結果を表 3 に示した。設定場面に対する「思い」について、自分の感情から表現されていたものは 111 人、患者の行動について感じたことの表現からのものは 32 人であった。最も多かったのは、〈自己あるいは他者、どちらか一方否定群〉で 50.7%、次は〈自己あるいは他者、どちらか一方分析・解釈群〉の 31.0% であった。

2) 性行動について

設定場面に対する学生の対応についての結果を表 4 に示した。患者に向かっての行動からスタートしているもの 110 人、自分に向けた言動がまずとられたもの 33 人であった。1 番多かった対応は、〈自己あるいは他者、一方否定群〉の 54.2% で、次に〈ごまかし・気づかないふり群〉の 22.5%、〈自己あるいは他者、一方問題解決群〉の 14.8% であった。

2. 教授後の調査結果、前と比較して

143 配布し、121 の結果が得られた (回収率

84.6%)

1) 性意識について

性に対するイメージ語は 126 語が表示され、1 人あたり 0 ～ 9 語の範囲で平均 2.2 語であった。教授前と比較すると範囲、量、総数とも減少していた。

イメージ語の上位 5 位について内容と割合は表 2 に示した。1 位の「男、女」は変わらず、「愛・愛情」、「男性・女性」が上位に入った。

イメージ語を 3 側面から分類し教授前との比較結果を図 1 で示した。上位 3 つは前と同様、身体+精神的側面、身体的側面、身体+精神+社会的側面であったが、割合は減少していた。

設定場面に対する「思い」について、結果を表 3 に示した。自分から感情を先に表現していたものは 72 人、患者の行動について感じたことからの表現のものは 49 人で、教授前と比較すると自分からの感情表現が中心のものが減り、患者行動について感じたものが増えていた。最も多かったのは〈自己あるいは他者、どちらか一方分析・解釈群〉の 38.8%、次に多かったのは〈自己あるいは他者どちらか一方否定群〉、26.4% であった。

望ましい群、望ましくない群、中間群に分けての教授前後の比較を図 2 に示した。

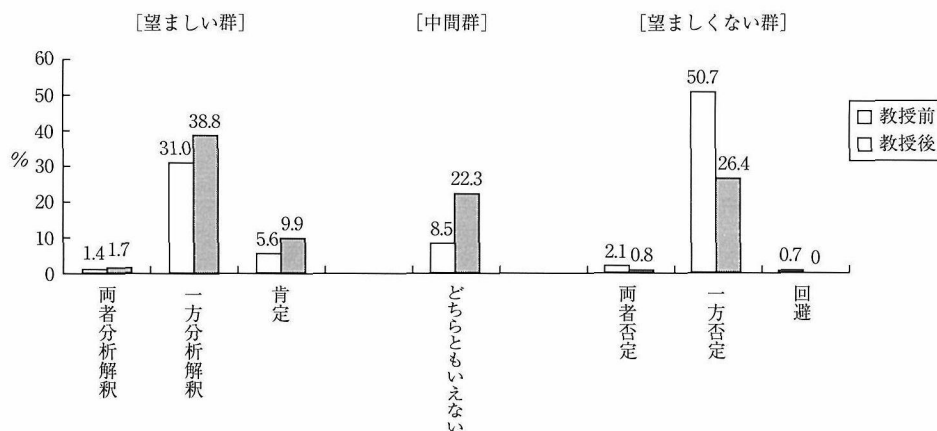


図2 設定場面に対する学生の「思い」の分類

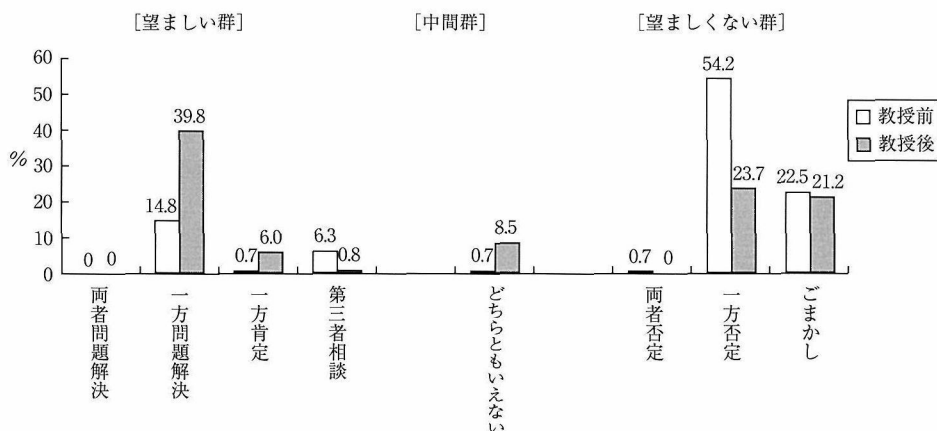


図3 設定場面に対する学生の「対応」の分類

教授前と比較すると、望ましい群が多少増え、望ましくない群が減少していた。特に〈自己あるいは他者、どちらか一方否定群〉が半減した。

2) 性行動について

設定場面に対しての学生の対応について結果を表4に示した。患者に向かっての行動からスタートしているもの106人、自分に向けた言動がまずとられたもの12人であった。一番多かったのは〈自己あるいは他者、どちらか一方分析・解釈群〉で39.8%、次が〈自己あるいは他者どちらか一方否定群〉の23.7%、〈ごまかし・気づかないふり群〉、21.2%であった。

望ましい群、望ましくない群、中間群に分けての教授前後の比較を図3に示した。

教授前と比較すると、望ましい群の増加、特に〈自己あるいは他者、一方問題解決群〉が倍増し、望ましくない群は減少、特に〈自己あるいは他者、一方否定群〉が半減した。しかし、〈ごまかし〉があまり減らず、中間群の増加と〈第三者相談群〉が減少した。

V 考察

1. 性に対する学生の傾向性

教授前のイメージ語は、総計252の語句が多様多様に表現され、高村らの研究結果⁹⁾と同様の傾向であった。高村らは性科学の第一人者であるハワイ大学のM・ダイヤモンド博士の言葉を引用し、多様化した看護学生の性に関するとりえ方について感嘆している。ダイヤモンド博士は、性のとりえ方は、良いとか悪いとかあるいは白とか黒とかの判断をすべきではなく、灰色のようなものにとらえることが大切、と言う。つまり、性の表現には、さまざまな表現やとりえ方が望ましいと言う。日本の社会では、性は恥ずかしいもの、口に出して言うべきでない事といった扱われ方をしてきた。否定的に扱われてきたにも関わらず、本校の学生に於いても、多様多様な表現がされたことは喜ばしい傾向と受け止められる。しかし、イメージ語の内容では、1位は「男・女」で、性別の性を表現する学生が約半数近くいた。これは性機能を中心とした身体的区分からの見方であり、性に関連する心理的な内容や、性役割からの表現に優位していた。3側面からの分類では、身体と精神的側面から表現した者が一番多く、次に身体的側面のみの表現であった。更には、3側面を統合した表現が2割弱で、社会的側面からとらえた表現は極めて少なかった。このことは社会的風潮や、学生の受けてきた性教育の実状から容易に想定できるものである。

性的場面に遭遇しての「思い」について一番多かったのは、〈自己あるいは他者、どちらか一方否定群〉、次に〈自己あるいは他者、どちらか一方分析・解釈群〉であり、著者らが最も望ましいものとした〈自己及び他者両者の分析・解釈群〉は非常に少なかった。

性的場面に遭遇しての「対応」については一番多かったのは、〈自己あるいは他者否定群〉次が〈ごまかし・気づかないふり群〉で1/4を占めていた。最も望ましい群とした〈自己及び他者両者の問題解決群〉は皆無であった。相談群は6.3%で、対応として分からない為、その場を離れ、婦長、教員、カンファレンスにか

けていく、というものであった。

性的場面に遭遇した時、自己及び他者の両者の思いを分析・解釈することに引き続き、両者の問題解決に向かう対応が最も望ましいと考えていたが、今回の結果では、否定的思いに引き続き、否定的な対応を半数以上の学生が取ることが分かった。対応が分からず、ごまかし・気づかない振りをする者、又、相談していく学生もいることが分かった。

以上より学生の傾向性は以下3点に要約される。

- 1) 性という言葉から受けるイメージは、性別の性としてとらえ、身体と精神的側面から捉える傾向がある。
- 2) 性的場面に対する思いは、自己あるいは患者のどちらかを否定している学生が多いことが分かった。
- 3) 性的場面に対する対応は、自己あるいは患者のどちらかを否定している学生が多く、次にごまかししたり、気づかないふりをして、その場に対応する学生の傾向性があることが分かった。

授業案の概要は表5に示したが、学生の傾向性から強調した点は以下の2点である。

- a) 性を幅広くとらえ考えていくために、性の概念の紹介、及び本研究で定義づけた性の概念についての解釈説明を行った。また、性の持つ3側面からの理解と、人間のライフサイクルにおける性の発達の理解をとおり、性は人の一生との関わりに深く関与し、多面的であることを強調した。
- b) 性的場面に対して、思いも対応も自己あるいは他者どちらかを否定していることに対して、人間の持つ性の多面性から患者の行動を洞察し、その原因を多面的に捉えることが出来るような性の持つ要素を加えていく。又、医療現場における性問題を意識化し、援助者としてのあり方、対応のあり方について教授した。

2. 授業案の評価

- 1) 性に対するイメージの変化ができたか：
単元のねらいとして「性の概念理解を通して

表5 精神看護学における授業案

単元；性と精神保健

ねらい	学習内容	方法
1) 性の概念と意味 ①性の概念の多面性を理解し広く捉える ②性の持つ人間関係への影響を理解する	1, 性の概念理解 ①性とは ②世界保健機構（WHO）の提唱する性の健康 ③ヒコマンセクシュアリティの概念 ④当講座の考える性の概念 ⑤人間の性の3つの特質	講義形式 (1.5h) 資料
2) 人間のライフサイクルと性の発達 ①性の機構、構造、精神・性的発達の段階を理解する ②各期における主要な特徴と性の発達を理解する	1, 人間のライフサイクルと性の発達 ①心の機能 ②心の構造 ③精神・性的発達の4段階 ④各期における主要な特徴と性の発達・課題	資料
3) 人間の性をめぐる医療と看護 ①医療現場に存在する性の問題を意識化する	1, 人間の性をめぐる医療と看護 ①医療・看護現場における性の問題 ・外来と患者の性・入院と患者の性 ・医療・看護行為が招く患者の性反応 ・疾病・治療が性に及ぼす影響 ・臨床における性の問題と看護・治療の関係	講義形式 (1.5h) 資料
4) 性に寛する援助の実際 ①性に関連した看護の必要性を認識し、性の援助者としてのあり方を理解する ②医療現場における性の問題に対する介入のあり方を理解する	2, 患者の性的問題への援助 ①性の援助者としての性の捉え ②性に関する援助の方法 ③適した援助方法、援助者の選択	資料

性の多面性、人間として、人間関係へ影響するものでもある」とし、WHOの性の健康の定義、アメリカ性情報、教育協会のヒューマンセクシュアリティの定義、又、日本での代表的と思われる医学、看護学からの定義、及び当講座の性の概念を紹介し、その内容の意味するところを説明した。又、性は人のライフサイクルに関連し性機能・性意識・性役割の変化の過程を資料を用いて講義を行った。が、結果的にイメージ語の上位5位の変化は余りなかった。性に対する3側面からの捉えに対しても多少、身体的側面からの捉えは減少したが、いわゆるヒューマン・セクシュアリティからのとらえとしては薄い。又、イメージ語の表現が教授後の調査では一人当たりの平均2.2と減少していることは、イメージとして多様性が減ったことを意味する。結果的には、性の原理的・本質的理解を種々の概念を通して教授してきたが、学生の性に対する意識・イメージの大きな変化には至らなく、単に知識の習得だけでは達成できないことが明らかになった。

性に対する意識・価値観はその生育過程に強

く影響され、潜在意識化されているものである。性に関する本質的理解とは、学生個々の価値観に結びつかなければならない。その価値観を援助者としての姿勢に具現していくには、まず、性の意識や価値観が社会や環境に影響されやすいこと、しかも日常に於いてはタブー視され、潜在化していることを自覚することが先決と考える。学生が持つ抽象的な意識や価値観を、学生の言葉に置き換え、その後に概念の理解に連携させていく。知識を自己の中で変容させていくことが、意識の変容には重要であると考え。

なお、今回の調査における交絡因子として、調査時期の前と後では3ヶ月半の時間的経過があり、その間、夏休みが入っていることと、後の調査では、前に比べ性をイメージする時間配分をしなかったこと。又、学生側の要因として、調査用紙内容が前調査と同じであること、Ⅱ時限目の最後に行った為、昼休みを控え、集中しなかったことが推測される。

2) 性的場面に於いて、患者及び自己からの分析・解釈していく「思い」、「対応」がとれるようになったか：

場面に対する「思い」の変化については、望ましい思いがわずかに増加し、望ましくない思いの群が減少している。一番変化したのは、〈自己あるいは他者、どちらか否定群〉で半数以下に減少し、総体的にはよい方向に向かった。しかし、一番望ましいとした〈自己・他者分析・解釈群〉が前後とも変わらず、他の望ましい群の増加が少なかった。

場面に対する「対応」の変化についても、望ましい群が増加し、望ましくない群は減っている。しかし、内容を見ると最も望ましいとした〈自己・他者問題解決群〉は皆無で変化は無く、問題解決が自己あるいは他者とどちらかに偏っていることから、総体的に見ると望ましい状態と考える。又、〈第三者相談群〉は9人から1人に減っている事も注目しなければならない。相談していく傾向が減り、〈自己あるいは他者解決群〉が増えたということは、授業を受け知識が豊富になった結果として、自己解決の方向に向かったと思われる。しかし、性の問題に関しては経験未熟な学生にとって、第三者と共に考えていく姿勢が必要と考える。

場面に遭遇しての看護者のあり方については、「偏見視した態度でなく、人間としての患者理解に繋がるような見方、援助者としてのあり方を理解する」をねらいとして、偏見をなくし患者の性の尊厳を保った関わりが行えるために、疾病や治療により変化する性やその問題点、性の援助者としてのあり方などを強調した。内容として、性を援助する看護者としてのあり方と性の捉え方、入院することにより変化する性と性の問題、対応のあり方、等である。教授方法としては資料を用いての講義形式であった。

その結果、総体的には望ましい方向に向かったといえるが、中間群が増えたこと、対応でごまかしが余り減らなかったこと、第三者相談は減ったことなどが問題として残る。学生からの意見として、「いざとなるとどうして良いか、わからないと思う」「理屈ではわかるがやっぱりイヤ」などがあり、これらの思いは、性に対

する本質的理解と看護者としての姿勢の中核が、単なる知識としての理解に止まり、学生自身の内的な価値観と結びついていない為の素直な反応と受け止められる。「イヤ」といった思いは、若い学生としては当然の反応と思える。しかし、看護者としてはこうした感情に止まることなく、その後の対応に努めていく姿勢が必要である。基本に沿った対応、または第三者に相談していく姿勢が必要である。患者を回避や無視していく事は、患者の人間性への無言の否定として受け止め、その後の患者―看護婦関係への影響は大きいと予測される。又、表出された性問題に対し受け止めることなく、そのまま放置していく事は、その後においてより問題、あるいは潜在化してしまうものである。自己洞察と対象の理解をしつつ、傾聴、共感、受容といったコミュニケーション技術を発揮し、性の援助者としての姿勢に立った対応が考えられるような教授方法の必要性が示された。中間群が増えごまかしがあまり減らなかったことは、性の意識と価値観の変容が図れなかった為であり、第三者相談群が減ったことは、知識を得たことから、自己解決に向かおうとする傾向が増したといえる。しかし、性に関する問題はその人の生き方、人格をも包含していくものであることを考えると、学生としての望ましい対応とは、相手を尊重した態度を基盤として、多くの相談や助言を得て相手と共に問題解決に向かうことであろうと考える。今後は学生自身が自己の傾向性を自覚し、相手にとって、よりよい対応が考えられることである。

3) 性の授業案への課題

以上、授業案の評価から今後の課題を展望する。

まず、性の概念理解の本質的理解に至らなかったことに対しては、概念の理解に対する教授内容として、概念の紹介や説明に主眼が置かれ、ヒューマン・セクシュアリティと言う概念での統合したとらえの展開が薄かったと考える。人間にとってのセクシュアリティとはどのような

なものか、そして、セクシュアリティとは文化・社会・心理的な影響が非常に大きく、人格の一部から切り離せるものでなく、その人の中心部分であり、人間関係を創造する基盤であるという、統合した見方の学びを深めていくことが必要と考える。そのためには、単に知識の習得だけでなく、自己に置き換えての思考の発展を伴う授業展開が望ましい。また、セクシュアリティの認識の揺さぶりに視聴覚教材、とくにVTRが有効である¹²⁾。との研究結果から、今後、そうした教材を活用した教育方法も検討していきたい。

次に、場面に遭遇したとき、性の援助者としての態度は総体的にはよくなったと言えるが、その場をごまかしたり、曖昧な態度で終わる人が余り減らなかったこと、また第三者に相談していく者が減少したこと、等に対しては、看護者として患者の性に関わる時、自己の性意識、価値観で患者を判断し、対応してしまうことは避けなければならない。そうした見方は患者の持つ重要な問題を見過ごし、真の看護援助に繋がらない。また、曖昧な態度での対応も、その後の患者との人間関係に影響を及ぼしていくものである事を念頭に、援助者としては自己の持つ性意識や傾向性を自覚し、対象には尊重した態度で関わっていかなければならないことを強調していく事が課題である。学生の意見の中の「理屈では分かるがやっぱりイヤ」等の意見は、理解は出来るが行動に移せないだろうと評価している。こうした学生には、性の援助を行う時の対象への尊重と、援助者としての認識をより深めていくことが必要と考える。方法としては、自己の性意識、傾向性の把握を授業の中で展開する。具体的には、今回行った調査内容を学生に問いかけ、その後、学生自身で分析し自己の傾向性を掴む。対応のあり方については、他の学生との話し合いの時間を設け客観的に見つめていく機会を持つこともよいと思う。又、対応のあり方についての学びを深めるべく事例展開や、ロールプレイ等を含めた演習等も導入して

ゆき、多くの意見を聞いて解決に向かえる態度を養っていききたい。

大谷は性に関する看護の課題として、①看護者自身の性的感情や態度、価値観の意識化、②必要な知識とその範囲、③情報の取り方及びその評価、性教育、カウンセリングなどの技術的問題の3点を挙げ、特に性知識を有することは患者理解を深め個々の性への援助に繋がる上で重要と述べている¹³⁾。性を教授していく場合、そうした視点を重視していきたい。特に今回の研究に於いて①の看護者の性的感情や態度、価値観の意識化は、性を学ぶ学生の時点で自己認識し、ヒューマン・セクシュアリティの概念で理解、価値観を養っておくことが重要と感じた。「ライフサイクルにおける性」「医療や看護に於ける問題と看護」の理解については、他の講座のとの関連もあるが、精神看護学での「性と精神保健」の授業では、学生個人の性意識を自覚し、自己の性の傾向性を認識し、看護者として性をどう捉えていくかを最重要視した展開を行っていききたい。

本授業で学んだ性の概念の、より深い理解と援助者としての態度、実践への育成については、今後の学内学習及び実習の場での統合で行われる。学習の場を通し、より個別的な学びに育んでいく課題もある。

3. カリキュラム改正に向けての課題

精神看護学は、前述した目的の通り科目構成を行い、精神保健論は「心と性の発達」に焦点を置いて教授内容・方略を検討してきた。今回、「性と精神保健」の単元に関する教授案作成及びその評価を行い、種々の課題が明らかになった。しかも、今回の改正カリキュラムにおいて再構成が必要であることから、精神保健論ではなく、「精神看護学」における「性に関する教授」の位置づけを始め、内容・時期・時間数・方略等の関しては、他領域との関連性をも考慮しての再編成が求められていると考えている。

今回は、性意識を「性を認識し、思考する働き」と定義したが、意識とは「自分自身の精神

状態の直感」(心理学小辞典)で有り、知識・感情・意志のあらゆる活動を含むと同時に、それらすべての根底に存するものであり、人間の社会生活や言葉の発達と共に発展するものである(哲学小辞典)。つまり、性意識とは社会や文化背景に多大な影響を受ける極めて個性の大きなものと言えよう。

これらは教授案を検討するには、看護学全体の中でのその単元の位置づけを考え、対象者の総体としてのレディネス、及び学生個々の個性を診断評価しなければならないことは当然であり、その一助としての教授前に調査を行ったことは評価できる。特に、今回は、本短大1回生への授業開始前での診断評価であり、今後の教授活動への有効な資料となる。しかし、今回の授業結果では、性に対する学生のイメージは、身体と精神的側面に偏りがあっても多種多様であったのが縮小・焦点化されたこと、及び身体的・精神的・社会的の3側面を包含した回答が若干減少したことなど、学生の柔軟な考え方に枠をはめた可能性がある。以上より講義の時期としては妥当であろうと考えるが、対象者総体の傾向性を掴み教授案を作成したが、その展開方法について十分考えられていなかったことが反省させられる。性に関するイメージを援助者としてどう考えるかについて、自己の内面に落ち、イメージを変えて取り組む姿勢を養う為の教授方略の工夫が必要であると考え。

援助者としての姿勢のあり方については、臨床の仮定場面での対処行動を学生の思いの反映としてみた。元来、行動は内面の精神活動や無意識の過程をも含めての生活体(人や動物)の示す内外の刺激に対する反応の総体を言うことから、培われてきた学生の性に対する思いの表出部分として捉えた。しかし、仮定から出された回答が「思い」の範疇をどれほど越えて、実際の行動を想定し得たかについては疑問が残る。とりあえず現時点では行動の表出として採用することでの不都合がないと捉えた。教授による知識の増加がアセスメント能力の強化に繋

がる場合は望ましいと考えるが、今回の結果では、教員が建設的な問題解決の方向への行動化に繋がると考えた患者の行為を、患者及び自己の両側面から解釈した者、及び指導者や教員などの第三者への相談をする者が非常に少なかったこと、反面、患者或いは自己一方のみの解釈での問題解決が増加していたことは、経験未熟な学生の思考過程としては妥当とは言えないと考える。患者の言動の真の意味を考えられること、及び自己の姿勢への振り返りと、患者にとっての最も望ましい解決方法を、第三者(臨床指導者、教員、患者や家族等)と共に考えられることが、性への援助者として望ましい姿であろうと考えている。しかし、これからの姿勢は臨床指導での実際の場面を通して育まれていくものであろうし、教室での数時間での教授の結果と短絡的に結びつけて考えるものでもない。

以上、教授案の評価を通して、今回のカリキュラム改正に向かった「精神看護学」における「性に関する教授」について、以下の課題が明らかになったので、その詳細について今後検討していくこととする。

- ①精神看護学における単元としてのねらいと位置づけ、内容と方略、時間数、履修時期、単元をどのようなねらいの元に、どのように配置するか、が重要となる。その結果、履修の時期や時間数が決定され、目標達成のための方略が考案されることになる。改正カリキュラムでは従来の枠組み(概論、保健、臨床看護)に拘束されなくなることから、各看護学では指定された単位の中での科目構築が自由裁量となる。従来の枠から開放されることは自由独自性も強調できる反面、拠り所のない不安定感もあり、今まで実践してきたことを十分に評価しなければ、新しい試みなどは根拠が伴わず問題を生じると考えていることから、今回の教授案の評価を一助として、今後の精神看護学の再構築を検討していく。
- ②学生のレディネス把握(診断的評価)の必要性

150名の学生に対しての一斉教授は効果的と

は言えないが、種々の制約の中では一斉教授に依存することは多い。学生のレディネスの把握に関して必要な情報は何か、情報収集の方法は、等を考えて診断的把握を行い、対象者に応じて教授案を検討していくことが必要である。今回の調査では教授案の作成及びその評価に有効であったので、今後とも情報収集及び評価の一助として学生の声を活用していきたい。また、あらゆる活動を含み且つ根底にあるものとしての意識は、社会の変化の中で発展することから、現在の社会病理と青少年との関連などは重要な情報となることから、教員として社会の変化の変遷を視野に入れての教育評価が求められていると捉える。

③総括評価は教授案の評価及び臨床実習との関連で行う。

教育の効果が現れるのは時間を要するものである。まず教授案は単元のねらいに沿って短期的評価を行い、ねらいの確認や、ねらいに沿った内容及び方略の自己・他者評価を行う必要がある。特に援助者としての姿勢を狙っている場合は長期的評価は不可欠である。それは臨床実習での指導につながる。臨床実習の場面では学生個々のレディネスを十分把握して、個別指導計画を立案し関わっていくことが重要である。特に臨床実習場面は患者の個別性や流動性を理解し、性の援助者としての育成を優先させ過ぎないように注意が必要である。学生の知識が増量し、患者に対して「問題があるはず」、「解決すべきが看護」、などの自意識が過剰になると、患者の人権侵害に至る可能性が高くなることが、今回の結果から示唆されているように感じている。学生の傾向性を把握して、教員は、患者の性に対する「need for help」を見極める力量を具備して学生指導に関わることで、及びその実践過程を経て、長期的評価として最終的な総括評価を行っていくことが必要であろう。

以上を念頭に、今後は各評価の関連性及び各単元のねらいと臨床実習の関連性、臨床実習指導のあり方などについて検討していく。

VI 結論

1. 学生の傾向として、性を性別の性、及び身体と精神的側面からの受け止めの偏りと、性的場面には半数以上が否定的思いと対応を示したことから、教授案には性の概念理解と、援助者のあり方について強調した。その結果、教授後では、性のイメージに精神と社会的側面からの表現が増えたことと、性的場面において否定的な思いと対応がへり、多少ではあるが望ましい方向に向かった。しかし、中間群も増えたこともあり、今後、知識を価値観と結びつけていく学習方略が課題となる。

2. カリキュラム改正に向けて、①精神科看護学での単元とその位置づけの検討、②学生のレディネス把握の必要性、③総括評価は教授案の評価、及び臨床実習との関連での実施、等の検討が明らかになった。

おわりに

性の概念理解の為に、学生の性のイメージ、性的場面对する思いと対応を把握し授業に反映させてみた。この研究はイメージ調査であることにより、条件を一定に近づけることの限界と、調査結果の読みとりを4人で行い客観性を持たせるよう努力したが、4人それぞれに性に対する認識が異なるため、読みとりの妥当性についてが研究の限界としてある。また、内面化している意識を記述していく方法にも限界はあると思う。しかしながら、調査結果から得た傾向性を踏まえ授業案作成し展開してみた結果、知識習得の変化として、総体的には望ましい傾向に向かっていた。今回の研究をとおして、性を理解し性への援助者となるためには、まず自己のもつ意識とその傾向性を認識しておくことの大切さが分かった。今後の授業展開に於いては、その点を強調した時間を設け、概念理解を自己の内なるものへの変化に向けていく方法を検討

してゆきたい。

引用文献

- 1) 大谷真千子；看護教育での性の授業をどうするか。基礎看護教育のなかでの性の授業案, 17, 看護展望, 15 (4), 1990
- 2) 前掲書 1), 21
- 3) 高村寿子；看護教育の中のセクシュアリティ教育の現状—誰が何をどのように教えているのか—, 26, 看護技術, 39(6), 1993
- 4) 前掲書 3), 24
- 5) 土屋八千代；社会病理と心身の健康を関連づけた授業構成, 9 看護教育新カリキュラム展開ガイドブック, 精神看護学⑪, 1996
- 6) W.J. フィプス他；新臨床看護学大系 臨床看護学Ⅲ, 228
- 7) 高村寿子；セクシュアリティの看護は今, 288, 看護管理 5 (5), 1995
- 8) メイブ・ソルター編, 前川厚子訳；ボディ・イメージと看護, 17 医学書院, 1992
- 9) 河野友信；成人の心身症と性、メディカルヒューマニティー 4 (1), 52, 1989
- 10) 井上幸子, 他；看護学大系 7 看護の方法, 211, 日本看護協会出版会, 1994
- 11) 高村寿子；私の看護実践自治医大看護短大の『性』のとりくみ, 744, 看護教育, 1992
- 12) 前掲書11), 747
- 13) 大谷真千子；看護に於ける性を考える (6), 130-134, 月刊ナーシング, 3(9), 1983

参考文献

- 1) Susan G. Poorman, 川野雅資, 訳；セクシュアリティ看護過程からのアプローチ, 医学書院, 1991
- 2) 石濱淳美；セクシュアリティ入門, メディカ出版, 1994
- 3) 石濱渥美；性保健学, メディカルカルチュア, 1994
- 4) 川野雅資, 他；看護と性—ヒューマンセクシュアリティの視点から—, 看護の科学者, 1991
- 5) 高村寿子, 他；看護職の性—セクシュアリティに関する認識と援助の状況—, 看護実践の科学, 1994
- 6) 高村寿子, 他；看護教育に於ける「性」に関する教育の現状と今後の課題, 看護教育, 33(10) 1992
- 7) 村元淳子；性問題からの回避とその影響, 看護技術, 39(6) 1993
- 8) 坂口けさみ, 他；患者の性問題と看護者の行動パターン, 看護技術, 39(6), 1993

- 9) 今西恵, 他；看護学生の性に関する感情, 看護教育, 36(10) 1995
- 10) 高石昌弘, 他；現在学校保健全集 6 性教育, ぎょうせい,